「作者の死－読者の復権」

０．はじめに

ロラン・バルトの「作者の死」及び「作品からテクストへ」における読者像・読書像を検討することによって、二週間後に迫った講演会へ向けて、会員の持っている読者像・読書像をより豊かなものにしてもらうことが本プレゼンの主旨である。プレゼンの進め方としては、バルトの言う「作者の死」を軸に話を進めながら、テキストに現われる読者像・読書像の概観を見ていこうと思う。

ただ始めに注意しておきたいことがある。それはバルトの思想というものには変遷があり、しかも彼の使用する概念自体も変化している（たとえばエクリチュールの概念（注 1)）ので、本プレゼンで取り上げる読者像・読書像がそのまま彼の思索活動全体におけるそれとは直接合致しないだろう、ということだ。以上を踏まえてもらった上で本プレゼンを進めていこうと思う。

１．作者の誕生とその死

現在ではもう完全に「作者」という概念は市民権を得ているが、はたして「作者」という概念はいつ頃に誕生し、影響力を持つようになったのであろうか？「作者の死」ということを語る前にこの疑問に答えておく必要があるように思われる。バルト自身がこの問いに対して述べている箇所があるので、まずはそれを引用しよう。

> *作者というのは、おそらくわれわれの社会によって生み出された近代の登場人物である。われわれの社会が中世から抜け出し、イギリスの経験主義、フランスの合理主義、宗教改革の個人的信仰を知り、個人の威信、あるいはもっと高尚に言えば、 人格 の威信を発見するにつれて生み出さたのだ。（注 2）*

「作者」が近代とともに誕生した、という彼の発言は的を射ているように思われる。実際「著作権」という概念が真に合法化されたのはフランス革命後である。また、口承文学において聴衆に称えられるのは語り部の 言語運用 であって彼の 才能 ではなかったし、そこでは語り部と聴衆の間で相互関係もあったことだろう。

しかし、近代と共に誕生した「作者」という概念はその誕生と共に権勢を振るうようになる。「作者」が物語を支配するようになったのだ。

> *作者は今でも文学史概論、作家の伝記、雑誌のインタビューを支配し、おのれの人格と作品を日記によって結びつけようと苦心する文学者の意識そのものを支配している。現　代の文化に見られる文学のイメージは、作者と、その人格、経歴、趣味、情熱のまわりに圧倒的に集中している。（注３）*

確かに、たいてい漱石の作品といえば「近代的知識人の自我と苦悩」といった観点で語られてきたし、ランボーの作品といえばヴェルレーヌとの関係や彼の放浪といった観点で語られてきた（のではないだろうか？）。この場合、読者は作者に対して従属関係にあり、作品に秘められた作者のメッセージを作品から汲み取るのがその役目となる。作品から汲み取れる意味はただ一つしかなく、それはほとんど神学的でさえある（もはや「作者」は神的である。作品は「作者」が創造したもので、「作者」に本質規定されているのだから）。この場合、読書は消費的・受動的な行為「解読」となる。批評家がある作品を「解読」するためにその作者がどんな人間であったか作者の生涯を調べ、用いるのは珍しいことではないであろう。こうした「解読」の対象となるもの、つまり「作者」が所持し、唯一の意味しか汲み取れないような対象をバルトは「作品」と呼ぶ。

これまで「作品」に対する作者の持つ支配力について書いてきたが、しかし、バルトは声高に「作者の死」を語る。

> *制度としての作者は死んだ。彼の公民的、情念的、伝記的人格は消滅した。王位を失った彼の人格はもはや作品に対して恐るべき父性を発揮することはない。（注４）*

「作者の死」とはいうけれども、もちろん物理的に作者が消滅するわけではない。実際書き手というものがなければ文章は成り立たないだろう。バルトが「作者の死」と言うとき、それは多分に言語学的観点からそう言うのであり、「作者」という制度、あるいは「作者」の人格が消失することを意味する。

> *言語学が示すところによれば、言表行為は、全体として一つの空虚な過程であり、対話者たちの人格によって満たされる必要もなしに完全に機能する。言語学的には、作者とは、たんに書いているものであって、決してそれ以上ではなく、またまったく同様にわたしとは、わたしと言う者にほかならない。言語活動は　人格　ではなくて　主体　を持ち、この主体は、それを規定している言表行為そのもの*

の外部にあっては空虚であるが、言語活動を　維持する　には、つまり、それを利用しつくすには、これで十分なのである。（注５）

言語学において重要視されるのは構造であり、そこでは一つ一つの諸要素の機能が問題になる。このような観点においては人格などまったく問題にされない。そこでは「作者」の人格などというものは考慮されるべき問題ではなく、夏目漱石だろうがドストエフスキーだろうが村上春樹だろうが同じことなのである。そのため、言語学的観点からすると「作者」は以前のような支配力を完全に失い、ただの「書き手」になってしまう。この「書き手」は、作品を一つの複雑な構造として捕らえたときの一要素でしかなく、情念も、感覚も、気質も、印象も持たない。もう作品は「作者」の所有物などではなく、むしろ作者は作品の一部分であり、紙の存在になってしまう。そこで語っているのはもはや「作者」ではなく、言語自身なのだ。こうして「作者」は殺されていくのだ。

２．作品からテクストへ

「作者」が登場し物語を支配していたとき、読者は「作者」の唯一のメッセージを読み取る「解読」を行っていた、と前述した。しかし、「作者」がその特権的な位置を消失した今、一体読者はどのような読書をすればよいのだろうか？読者は読書をしてもそこから何も汲み取れずに、ただ茫然自失として立ち尽くさなければならないのであろうか？否、それは違う。むしろ読者は一つの作品から複数の意味を汲み取れるようになったのである。つまり、どうぞお好きにお読みなさい、というわけだ。作品は「作者」の手から読者の手へと渡されたのである。

この「作者の死」以後に読者の対象となったものをバルトは「作品」ではなく「テクスト」と呼ぶ。しかし、「作品」と「テクスト」は何も物質的に区別されるものではない。古典的なものが「テクスト」であり、前衛的なものは「作品」である、などと言うことはできない（ただし、より「テクスト」に適しているかどうか、と言うことは可能であろう）。「作品」と「テクスト」の違いは「作者の死」によって生じた対象への見解の相違である。このバルトの言う「テクスト」がどのような概念であるかを一言で言い表すのは難しいので、この概念は概観を眺めるにとどめ、むしろそこで読者がどのようなものとして扱われているかを見ていきたい。

「作品」と「テクスト」で最も異なるのは、「テクスト」が複数的である、という点であろう。先に述べたとおり、「作品」においては「作者」が定める究極的な意味が存在していた。それは単一的な世界である。しかし、「作者の死」以後に誕生した「テクスト」においては究極的な意味など存在しておらず、還元不可能な諸要素が存在しているだけなのである。

テクストとは多次元の空間であって、そこではさまざまなエクリチュールが、結びつき、異論をとなえあい、そのどれもが起源となる

ことはない。テクストとは無数にある文化の中心からやってきた引用の織物である。（注 6）

まさに「テクスト」とは織物にたとえられるべきものであって、さまざまなエクリチュールが編みあわされてできたものなのである。しかし、それは固定された構造として存在するのではなく、むしろ構造化として存在し、中心を持たず、閉止を知らない開かれた存在である。こうした複数的で拡散的な「テクスト」が収束する場はどこであろうか？「作者」が消失した今、それは読者であるといえる。「テクスト」の中に存在するさまざまなエクリチュールを、読者は把握することができる。

読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。あるテクストの統一性は、テクストの起源ではなく、テクストの宛て先にある。（略）読者とは、歴史も、伝記も、心理ももたない人間である。彼はただ、書かれたものを構成している痕跡のすべてを、同じ一つの場に集めておく、あの誰かに過ぎない。（注 7）

このように読者は「テクスト」の収束する場であるが、「作者」の場合と同じように無為な主体でしかない。しかし「作者」と読者の間には大きな違いがある。それは「作者」は紙の存在であるが、読者は現存する生身の存在だ、ということだ。そして、「テクスト」における読者は「作品」に対する読者のように唯一のメッセージを探求することなしに、自らエクリチュールを組み立て、なかば恣意的な意味を産出するのである。それは「解読」のような消費的読書ではなく、生産的で、遊戯的だ。こうした読者においては、書くこと（エクリチュール）と読むことの距離が縮まっていくのだ。

こうした読者像から「快楽」という読書像が浮かび上がってくる。確かに「作品」においても読書を楽しむことはできた。しかし、何度も言うようだけれど、「作品」における読書は「解読」であり、消費的な読書でしかない。読者が「ふたたび書く」ことができないという点において、それは消費的な快楽でしかないのだ。これに対して、「テクスト」における読書は実践的、生産的であり、書くことと読むことの距離は縮まっている。そのため、「テクスト」において読書はより距離のない快楽と結びつくのだ。もはや読者は「作者」に縛られることなく、（その「テクスト」が許す限りではあるが）自由に「テクスト」と戯れられる存在になったのである。

３．軽いまとめと個人的見解

「作者の死」と「作品からテクストへ」という二つの「テクスト」を取り上げてきたが、ここでバルトがやろうとしたことは、要するに読書という行為を「どのように書かれたのか？」という地平から「どのように読むのか？」という地平に移す、ということだったのだろう。言いかえれば読書を作者から読者のものへと移す、ということだ。そうすることによって生まれたのが「作者の死」であり、「テクストの快楽」であった。

バルトが「作者の死」や「テクストの快楽」を宣言してから約三十年経つ。しかし、どうだろうか？現在、本当に読者に「作者の死」や「テクストの快楽」が認識されるようになったのであろうか？僕にはそうした認識が読者の間に広まっているとは思えない。いまだに「作者」の持つ影響力は大きいものがあると思う。そうした僕の考えが実際に正しいのならば、今回見てきたバルトの思想には、どこか落ち度があるのではないだろうか。たとえばバルトの想定する読者と書物の関係は形而上的であり、そこでは読書をするうえでの身体性というものは一切加味されない。今回扱ったテクストはもう古典であるから、そうした方面からの批評もあるのかもしれない。これからの勉強会で取り上げてもらえれば嬉しい。

参考文献

- ロラン・バルト『物語の構造分析』（みすず書房）
- ロラン・バルト『テクストの快楽』（みすず書房）
- ロラン・バルト『エクリチュールの零度』（ちくま学芸文庫）
- テリー・イーグルトン『文学とは何か』（岩波書店）
- 『現代思想』1980 年 6 月号（青土社）

注1 『エクリチュールの零度』においテエクリチュールは「著作家が自分の言語の＜自然＞をそのただなかに位置づけようと決心するところの社会的な領域の選択」（ロラン・バルト『エクリチュールの零度』ちくま学芸文庫より）としているが、「作者の死」や「作品からテクストへ」においてはもっと広い意味で「自動詞的に書く行為」として使われていると思われる。

注2 ロラン・バルト『物語の構造分析』「作者の死」ｐ80 より。

注3 前掲ｐ80～81 より。

注4 ロラン・バルト『テクストの快楽』ｐ51～52 より。

注5 前掲ｐ83

注6 前掲ｐ85

注7 同上ｐ89